



# 丹波育児院

～辻原光治とその周辺の人々～

第18回

## 倉田健治郎と新宮涼亭

今回は辻原光治から離れて横道にありますが、倉田健治郎や近藤亮太郎について調べていて興味を惹かれた話を紹介します。

医学修得のため京都へ出た倉田健治郎が師事した人物に新宮涼亭がいました(前々回)。涼亭(一八五三～一九二〇)は、東京医科大(東大)卒、京都府立医大内科部長や京都医師会理事などをつとめた人物で、江戸後期の有名な蘭方医新宮涼庭(一七八七～一八五四)の孫です。



新宮涼庭肖像 巨勢小石筆

その涼庭は漢方医とし出発しますが、蘭方医に転じ

たのは松山の医師近藤一之進宅で『西説内科撰要』を読んだのがきっかけでした(山本四郎『新宮涼庭傳』)。松山の近藤一之進といえ

## 「千両医者」新宮涼庭

涼庭は天明七年(一七八七)丹後由良(宮津市)生まれ、十一歳から福知山の伯父の下で漢方医学を学び、のち二年間江戸に滞在し、帰郷して丹後で開業しました。

二一歳のとき近藤一之進宅で『西説内科撰要』に出会い、その内容の正確さに感銘を受け、オランダ医学に眼を開かれます。『西説内科撰要』は、

津山藩医の宇田川玄随(一七五五～一七九七)が寛政五年(一八七三)から出版を始めた日本初の西洋内科の翻訳書です。

## 涼庭と近藤一之進

近藤の勧めもあって涼庭は長崎遊学に出立、長崎では出島のオランダ人医師から教えを受け、六年間滞在、文政元年(一八一八)帰郷して翌年京都で開業しました。京都では自ら「千両医者」と称したほどの流行医となり、天保十年(一八三九)には南禅寺に学問所「順正書院」を創建しました(跡地は現在湯豆腐料亭「南禅寺順正」)。

涼庭は経済の才にも長じ、南部藩や越前藩などの藩政改革にも寄与し、津藩藤堂家の学堂建設にも献金しました。津藩といえは倉田健治郎の父が典医をつとめていた藩でした。

一之進との関係では天保七年(一八一〇)、長崎へ向かう途上の八月十一日、近藤宅に一泊して「夜おそくまで医事を談じ」ています。弘化二年(一八四五)には涼庭一家は娘の病氣療養のため城崎温泉に二か月間滞在しますが、帰路の四月十六日「松山村に一泊、近藤一之進父子来訪」しています(いずれも山本前掲書)。

また二人は、文政五年(一八二〇)の『和蘭薬性弁』の発行に参加しました。同書は現京田辺市出身の蘭学者藤林普山(一七八一～一八三二)による著作ですが、一之進は「近藤一進惟和」として涼庭とともに序文を寄せ、出版に至る経緯を記しています。『京都の医学史』(京都府医師会)は、近藤を藤

林晋山の門下としています。

これらを考え合わせると、涼庭と一之進の交流はかなり早くから始まり、親密な関係が永く続いたと思われる。西洋医学への開眼は、むしろ一之進の方が先輩だったかもしれません。

江戸や長崎からはもとより、京都からも遠く離れた片田舎の松山ですが、この時代に最新の西洋医学を摂取した先人がいたとは、我が郷里を「見直し」たい気持ちになります。

## 旗本柴田七九郎

近藤家に関してもうひとつ、エピソードがあります。近藤家が代々旗本柴田氏の代官をつとめていたことはすでに述べましたが、その柴田氏の末裔に関する話です。

柴田氏は、丹波の船井・氷

上・何鹿郡内に合計五千五百石余を有する大旗本でした。

船井郡内では現京丹波町域の紅井・新宮・橋爪・大朴・坂井・井脇の全部と中台・井尻・猪鼻・院内の一部が所領で、合計二千七百六十七石余、全体の約半分を占めます(幕末時点)。この村々の大部分のちに松山村を構成し、初代村長に近藤家当主・環が就任したことは既述のとおりです。

柴田氏の先祖は徳川家康の家臣でした。あるとき合戦で六十三本の矢を放って戦功を挙げたことが家康に認められ、七×九〇六十三から「七九郎」と名乗るよう命ぜられました。子孫も代々七九郎を名乗りましたが、その最後の七九郎が晩年を松山で過ごし、当地に葬られたというのです。

## 松山役場小使として

柴田氏の江戸屋敷港区赤坂は、もとは「忠臣蔵」で有名な赤穂藩野家のものでした。『忠臣蔵』の名場面「南部坂の別れ」の舞台となる場所です。浅野家を取りつぶされた後、その二千五百坪の広大な邸を柴田氏が拝領しました。

明治維新で武士の時代が終わると、柴田氏は没落します。困窮した七九郎は、明治五年、家屋敷を勝海舟(二八二三～一八九九)に五百両で買ってもらいました。

勝海舟は、坂本龍馬の師であったことや西郷隆盛と会談して江戸城の無血開城をもたらしたことで有名で、維新後は旧幕臣の支援に努めました。

七九郎は邸を売り渡した後、その隣接地に仮住まい

していましたが、五百両の金もすぐに使い果たし、何

度も勝に無心しています。勝部真長『新装版勝海舟』(PHP研究所)によると、七九郎はついに「財産一点モ之レ無く、乞食ノ姿ニ陥リ、妻フジ、倅松之亟とともにかつての領地丹波へ下り、近藤家へ転がり込みました。途中で妻が病死しても葬式も出せませんでした。旧幕時代ニ学問ヲ為サズ、唯空シク日月ヲ繰返シタ」ため「不学ト無筆」となった七九郎は、役場の小使として働き、死後、近藤家の墓地に葬られました。いまも橋爪の共同墓地名簿には「柴田」

の名が残っています。

「五千五百石の大身だった男が、知行地の役場の小使に落ちてまで生き恥をさらし、腹も切れない。旧幕臣の没落過程の一例」だと勝部真長は評しています。かつての「殿様」を小使に採用し最期まで面倒見たのは近藤環だったでしょう。明治二二年に役場書記となつた辻原光治に、七九郎と接する機会があったかどうかは不明です。

環は天保十四年(一八四三)生まれ、弘化二年(一八四五)に新宮涼庭が松山に一泊したときにはまだ二歳だったことから考えると、宿を訪ねた「近藤父子」は、環の祖父(一之進)と父で、亮太郎からは曾祖父と祖父に当たるとは推測していません。(山下幾雄)



近藤環(1843~1906)